硬式野球部

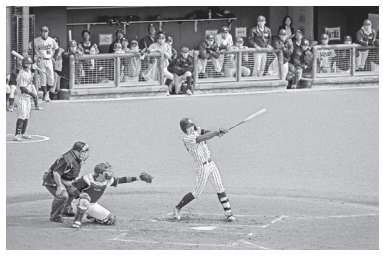
2025年仙台六大学野球
秋季リーグ戦で準優勝

本学硬式野球部は、8月30日から10月15日の日程で開催された仙台六大学野球秋季リーグ戦において、見事準優勝しました。この結果、2015年以来となる東北地区大学野球代表決定戦へ出場を果たしました。

今大会では、序盤から粘り強い試合運びを展開しました。特に、リーグ中盤の第3節と第4節では、強豪である仙台大学と東北福祉大学を相手に接戦を制し、重要な勝ち点を積み上げました。第6節で東北大学に敗れて惜しくも準優勝となったものの、東北地区大学野球代表決定戦へ駒を進める快挙を達成しました。

代表決定戦では、北東北大学野球連盟第1位の八戸学院大学と対戦しました。1試合目では打線が爆発し、大量20得点を奪う猛攻を見せました。投手陣も相手打線を完璧に封じ込め、20-1（7回コールド）で快勝しました。しかし、同日に行われた2試合目では、序盤から一進一退の息詰まる攻防が続きましたが、終盤に相手の粘り強い攻撃を許し、2-4で惜しくも敗退となり、明治神宮野球大会への出場はかないませんでした。

春先からの厳しい練習の成果が随所に発揮された今大会。投手陣の力投、そして打線の最後まで諦めない粘り強い攻撃など、チームが一丸となって挑む真摯な姿勢は、応援に駆け付けた仲間や同窓生など、多くの観客に感動と勇気を与えてくれました。選手たちの姿勢は本学のスポーツ精神を体現するものであり、今後のさらなる飛躍が期待される結果となりました。



2025年仙台六大学野球秋季リーグ戦

■本学の表彰選手

【ベストナイン】
指名打者：奥山　蓮（教養学部4年）

【個人賞】
最優秀投手賞：堀川大成（経済学部4年）
敢闘賞：堀川大成（経済学部4年）
最高打率賞：奥山　蓮（教養学部4年）

■試合結果

月日	試合結果		
8/30(土)	東北学院大学	11-0 (5C)	宮城教育大学
8/31(日)	宮城教育大学	5-15× (6C)	東北学院大学
9/13(土)	仙台大学	中止	東北学院大学
9/14(日)	仙台大学	3-4× (延10)	東北学院大学
9/16(火)	東北学院大学	3-2	仙台大学
9/20(土)	東北福祉大学	中止	東北学院大学
9/21(日)	東北福祉大学	3-4	東北学院大学
9/22(月)	東北学院大学	5-6× (延11)	東北福祉大学
9/23(火)	東北福祉大学	5-6	東北学院大学
10/4(土)	東北学院大学	0-2	東北大学
10/5(日)	東北大学	3-2	東北学院大学
10/11(土)	東北学院大学	3-3 (8C)	東北工業大学
10/12(日)	東北工業大学	中止	東北学院大学
10/13(月)	東北工業大学	2-9× (8C)	東北学院大学
10/14(火)	東北学院大学	4-4 (延11)	東北工業大学
10/15(水)	東北工業大学	2-6	東北学院大学

※Cはコールド、延は延長、×はサヨナラ試合

2025年東北地区大学野球代表決定戦

■試合結果

月日	試合結果		
10/25(土)	八戸学院大学	1-20 (7C)	東北学院大学
	八戸学院大学	4-2	東北学院大学

東北学院史資料センター主催

土樋キャンパス百年のあゆみ

二〇二五年度公開シンポジウム　開催報告

東北学院史資料センターは、二〇二六年に土樋キャンパスが開設百周年を迎えるのを記念し、「土樋キャンパス百年のあゆみ」と題した公開シンポジウムを十一月十五日に開催した。同日午前には「学校法人東北学院所有文化財見学ツアー」も実施され、一日を通してキャンパスの歴史を体感する貴重な機会となった。

文化財見学ツアーでは、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂や東北学院大学本館（旧専門部校舎）、そして現在整備計画中の東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）といった貴重な歴史的建造物を見学した。参加者は、礼拝堂が米国のエラ・A・ラーハウザーからの五万ドル（現在の価値で約五億円程度）の献金を記念して命名されたこと、正面のステンドグラスが英国のヒートン・バトラー＆バイン工房から直輸入され、創建当時の輝きを保つ国内唯一の現存例となっているといった説明を受けた。また、本館については、その建設背景、建築意匠、素材、設計者のJ・H・モーガンについて詳述された。重要文化財である東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）は、明治時代に建てられた日本最古級の宣教師館で、東日本大震災で被災したため、現在は整備が計画されていることも説明された。

午後からはホーイ記念館ホールでシンポジウムが開かれ、大西晴樹院長・学長のあいさつに続き基調講演が行われた。初めに、東北学院史資料センター客員研究員の日野哲氏が「東北学院創立四十周年と土樋キャンパスの開設：記録映像を見ながら」をテーマに登壇。三校祖による創立時の状況から、戦前のキリスト教教育への迫害による生徒数激減の危機をシュネーダーの経営手腕で乗り越えた歴史を解説し、記念映画「東北学院の四十年」の上映では、聴講者に歴史の重みを鮮明に伝えた。

次に登壇した本学工学部の崎山俊雄准教授は「土樋キャンパスの百年：一九二六―二〇二五」と題し、創立者の明確なビジョンとシュネーダーの英断が後の発展の礎を築いたことを強調した。また、火災や戦災などの危機を乗り越えてきた歴史を解説した上で、歴史の継承、新しいものと歴史あるものとの融合、歴史的建造物によるブランディングが重要であることを力説した。

さらに、関西学院大学と立教大学から学校史の専門家を招き、他大学の事例や取り組みを紹介いただいた。関西学院大学社会学部教授で関西学院学院史編纂室長の赤江達也氏は「キリスト教主義学校の空間思想史―関西学院のキャンパスから―」をテーマに、原田の森キャンパスから西宮・上ケ原キャンパスへの変遷と「スパニッシュ・ミッション・スタイル」による統一された景観が、創立者の理念「Mastery for Service」と結び付き、戦後―二つの震災と一つの戦争を経験して―」をテーマに、現在編纂中の『立教学院百五十年史』に触れ、その背景や特徴、過去の年史との違いを解説した。鉄道前夜の都市縁辺への移転による資産価値最大化の成功や、関東大震災や空襲後の迅速な再建、そしてチャペルを免震構造とするなど、災害を乗り越えながら精神的アンカーを堅持してきた歴史を詳述した。

休憩後のパネルディスカッションでは、四名の講演者に加え元本学副学長で法学部名誉教授の齋藤誠氏がファシリテーターを務め、三大学の歴史的建造物、キャンパスの立地とアイデンティティ、東日本大震災の影響について奥深い議論が展開された。東北学院が都市中心部に留まり続けた歴史、関西学院の郊外型維持、立教大学の都市型キャンパスにおけるカレッジ・ゴシック様式の継承など、各大学の立地や建築が、その後のアイデンティティとその地域における発展を決定付ける根本的な分岐点であったことが浮き彫りになった。

キャンパスは百年前の学生と現代の学生が同じ場所で学ぶ歴史の連続性を体感する場であり、「建学の精神」を建築という形で未来へつなぐことの重要性が改めて確認された。シンポジウムは、基調講演とパネルディスカッションによる深い議論の末、盛会のうちに幕を閉じた。

陸上競技部

秩父宮賜杯　第五十七回全日本大学駅伝対校選手権
出場結果報告

十一月二日、秩父宮賜杯第五十七回全日本大学駅伝対校選手権大会が行われ、本学陸上競技部が二大会ぶり十八回目の出場を果たした。

出場に先立ち、十月十五日に朝日新聞仙台総局で壮行会に臨み、二十一日には大西晴樹学長を表敬訪問した。大西学長は長距離ブロックキャプテンの吉田奏斗さん（経済学科三年）と副主務の齋優太郎さん（心理行動科学科三年）、高橋賢一監督と小川裕一コーチを出迎え、本大会出場を祝った。

大会には、全国から二十五大学とオープン参加の日本学連選抜、東海学連選抜の計二十七チームが出場。愛知県の熱田神宮から三重県の伊勢神宮までのコースを八人の選手が襷でつないだ。応援には本学の教職員をはじめ、応援団や吹奏楽部、チアリーディングチーム、東海地区の同窓生も駆け付け、選手たちに声援を送った。

最終順位は二十五位と全国とのレベルの差を突き付けられる結果となったものの、夏合宿の成果が随所に見られ、全員が棄権することなく完走。チームとして一致団結した走りを見せた。

出場選手

1区	吉田	奏斗（3年）
2区	萩川	晄（2年）
3区	齋藤	颯希（4年）
4区	中野	朝斗（4年）
5区	阿部	輝翔（3年）
6区	齋	優太郎（3年）
7区	新美	和哉（3年）
8区	児玉	脩平（2年）
補員	佐藤	翔太（2年）
	渥美	悠太（1年）
	佐藤	充輝（1年）
	山中	陸翔（1年）